

<「知るっば!久留米」 令和3年4月29日(木) 12:30~放送分>

からくり儀右衛門

～第5回～ 「発明王の晩年 東京編」

<ゲスト：久留米市文化財保護課 小澤太郎さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、久留米が生んだ発明王『からくり儀右衛門(ぎえもん)』をテーマにお送りしています。

ゲストはこのかたです。

ゲスト:小澤太郎さん(以下「小澤」)

久留米市文化財保護課の小澤太郎です。

よろしくお願いします。

坂本 シリーズ最終回となりました今回、第5回のテーマは『発明王の晩年 東京編』です。

今月は大河ドラマのようなシリーズですが、

儀右衛門さんは、当時としては異例のご長寿で、75歳のときに東京移住を決意しています。

この年齢になって、からくり儀右衛門を動かしたものは何だったのでしょうか？

小澤 いきなりストレートな質問ですね。

新政府から声がかかったのが、直接の原因です。

しかし、そのベースには、あくなき探求心といえますか、

新しいチャンスにはどん欲に取り組む情熱があったからではないでしょうか。

坂本 既に75歳ですからね。すごい心意気といえますか、心根ですよ。

当時は、明治維新から廃藩置県ということで、スポンサーだったお殿様たちもいなくなって、

儀右衛門さんからすれば、会社倒産、リストラ状態なんですけど、

新しく日本の中心となった東京で「一旗揚げてやろう!」という気概を感じますよね。

小澤 そうですね。新政府は、文明開化から殖産興業を推し進めようとしていました。

鉄道や電信、郵便、灯台などの交通や通信システムなど、

近代国家として必要なインフラ整備を担う工部省が設置されました。

この工部省のトップは、石丸安世(いしまるやすよ)という人で、

佐賀藩で儀右衛門さんたちと科学技術を開発していた佐賀時代のチームメートなんです。

石丸さんから手伝ってくれと声がかかったので、

弟子たちと共に「我々の技術を試すのだ!」って檄を飛ばして上京したそうですよ。

坂本 自分たちの技術に対する強烈な自負といいますか、自信を感じますよね。
からくり儀右衛門さんたちは、東京銀座で「東芝」の原型となる田中製造所を開設していますが、
どんな工場だったのですか？

小澤 これは、日本初の民間機械工場なんです。
かつて、儀右衛門さんを佐賀藩に誘った佐野常民(さのつねたみ)と共にウィーン万博を
視察してきた弟子から最新の電信機技術を学び、国産化に成功します。

坂本 電信機だったら前回も話がありましたが、佐賀藩時代に試作していましたよね？

小澤 そうです。それを基に最新技術も使って、実用化に向けて工場生産を開始したんです。
政府が、東京の汐留に電信機のオペレーターを養成する学校を設立すると、
そこに練習機200台を生産し納入しました。
これをきっかけに、田中製造所は工部省の指定工場になります。

坂本 80歳近いのに新たな事業を起こして、短期間のうちに軌道に乗せるってすごいエネルギーですね。

小澤 人生50年の時代にですよ。
銀座にできた赤レンガ街の一角に工場兼店舗を構えたのですが、
店の入り口には、「あらゆる機械の発明製作の依頼に応じる」と書かれた看板が掲げてありました。

坂本 この店が、後に「東芝」の発祥となるわけですね。
その他には、どんな機械器具を製造していたのですか？

小澤 例えば、明治9年にグラハム・ベルが発明した電話機を、政府がサンプルで輸入したんです。
その実機を見た儀右衛門さんは、これだったら製作可能だということで、
翌年には工場ですべて試作したんです。

坂本 へえ〜!まずは電信機から始めて、次は西洋の最先端である電話を作っているんですね。
日本の近代通信は、儀右衛門さんから始まったということで、
近代エレクトロニクス産業の発祥と言えるんでしょうね。

小澤 試作機を工場と店舗に置いて、マスコミを呼んで実演してみたいです。
私も当時の新聞記事を読んだことがあるんですが、
「実際その場に相手がいなくても、仕事の打ち合わせができる!なぜなんだ!!」
と大変な話題になったようです。

坂本 当時にしたら大変なことだったんでしょうね。
田中製造所には、優秀な人材も集まっていたそうですが、どんな人物がいたのですか？

小澤 さきほどの工部省に出仕した技術者でいえば、
田中精助（たなかせいすけ）や川口市太郎（かわぐちいちたろう）というお弟子さんたちがいました。
彼らはそれぞれの分野で出世した人たちですが、民間で活躍した人たちもいます。
例えば、日本における工作機械の草分けである池貝庄太郎（いけがいしょうたろう）、
この人は池貝という会社を作ります。
それから、電気機械分野では沖電気工業の沖牙太郎（おききばたろう）、
アンリツという有名な会社の石黒慶三郎（いしぐろけいざぶろう）などがいます。
みなさんがよく知っている会社ですと、
国産自転車の草分けである宮田工業の宮田政次郎（みやたせいじろう）などもお弟子さんですよ。

坂本 田中製造所からできた東芝もそうですが、
久重さんのお弟子さんやチーム久重の面々も、後に色々な会社を創業したということですね。
まとめになりますが、からくり儀右衛門こと田中久重という人物は、
江戸から明治の日本にどんな影響を与えた人だったといえますか？

小澤 久重が生まれ、生きてきた江戸時代の技術というのは、
今ある道具をいかに上手に使うかという「修練」、つまり修行みたいなものが重視されていました。
つまり、「誰もが使いやすい便利な道具を発明する」という方向を向いていなかったように思います。
儀右衛門さんは、いち早く江戸時代の技術体系と思考を抜け出していて、
「人々の生活に便利な、人々のための機械器具」を作り続けました。

坂本 誰もが使いやすいものを作ろうという発想をしていたということですね。

小澤 あと、人材に関してですが、従来の技術は「一子相伝の秘密主義」だったんですよ。
なので、ごく一部の弟子にだけ、しかも口伝で教えるという状況でした。
ところが、久重は多くの弟子や試験をして雇った人には、技術をどんどん伝授していて、
その教えを受けたそれぞれが、日本を代表する企業の創業者となりました。
田中製造所では、技術者と製品を製造する労働者の分業と協業を行っていました。
つまり、経営方法は、江戸時代のやり方ではなく、近代初期のマニュファクチュア、工場制手工業の
段階に達していたわけです。
そういったことを考えると、儀右衛門さんは近世から近代への橋渡しを担ったといえると思います。
近代的なモノづくりの先駆者として、その功績は大変大きいでしょう。
そして、儀右衛門さんの情熱と探求心は、
現代の「モノづくり、日本」へと脈々と受け継がれているのではないかと考えます。

坂本 文化財保護課の小澤さん、5回にわたり興味深いお話をありがとうございました。
次回は5月ということで、筑後川にやってくる初夏の風物詩『エツ』をテーマにお届けします。
おたのしみに。